

[B年] 棕梠の主日(2023年4月2日)

【旧約聖書日課】 イザヤ書56章1~8節

- 1 主はこう言われる。
正義を守り、恵みの業を行え。
わたしの救いが実現し
わたしの恵みの業が現れるのは間近い。
- 2 いかにか幸いなことか、このように行う人
それを固く守る人の子は。
安息日を守り、それを汚すことのない人
悪事に手をつけないように自戒する人は。
- 3 主のもとに集って来た異邦人は言うな
主は御自分の民とわたしを区別される、と。
宦官も、言うな
見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。
- 4 なぜなら、主はこう言われる
宦官が、わたしの安息日を常に守り
わたしの望むことを選び
わたしの契約を固く守るなら
- 5 わたしは彼らのために、とこしえの名を与え
息子、娘を持つにまさる記念の名を
わたしの家、わたしの城壁に刻む。
その名は決して消し去られることがない。
- 6 また、主のもとに集って来た異邦人が
主に仕え、主の名を愛し、その僕となり
安息日を守り、それを汚すことなく
わたしの契約を固く守るなら
- 7 わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き
わたしの祈りの家の喜びの祝いに
連なることを許す。
彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら
わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。
わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。
- 8 追い散らされたイスラエルを集める方
主なる神は言われる
既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙10章1~10節

いったい、律法には、やがて来る良いことの影があるばかりで、そのものの実体はありません。従って、律法は年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人たちが完全な者にすることはできません。²もしできたとするなら、礼拝する者たちは一度清められた者として、もはや罪の自覚がなくなるはずですから、いけにえを献げることは中止されたはずではありませんか。³ところが実際は、これらのいけにえによって年ごとに罪の記憶がよみがえって来るのです。⁴雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができないからです。⁵それで、キリストは世に来られたときに、次のように言われたのです。
「あなたは、いけにえや献げ物を望まず、むしろ、わたしのために体を備えてくださいました。

- 6 あなたは、焼き尽くす献げ物や罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした。
7 そこで、わたしは言いました。
『御覧ください。
わたしは来ました。
聖書の巻物にわたしについて書いてあるとおり、神よ、御心を行うために。』」

⁸ここで、まず、「あなたはいけにえ、献げ物、焼き尽くす献げ物、罪を贖うためのいけにえ、つまり律法に従って献げられるものを望みもせず、好まれもしなかった」と言われ、⁹次いで、「御覧ください。わたしは来ました。御心を行うために」と言われています。第二のものを立てるために、最初のを廃止されるのです。¹⁰この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。

【福音書日課】 ルカによる福音書23章32~49節

³²ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。³³「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。³⁴「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。』」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。³⁵民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」³⁶兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、³⁷言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」³⁸イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

³⁹十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」⁴⁰すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。」⁴¹我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」⁴²そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。⁴³するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。
⁴⁴既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。⁴⁵太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。⁴⁶イエスは大声で叫びれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。⁴⁷百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。⁴⁸見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。⁴⁹イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書56章1～8節

- ¹ 主はこう言われる。
公正を守り、正義を行え。
私の救いが到来し、私の正義が現れる時は近い。
- ² なんと幸いなことか、このように行う人
それを揺るぎなく保つ人の子は。
安息日を守り、これを汚すことのない人
いかなる悪事にも手を出さない人。
- ³ 主に連なる異国の子らは言うてはならない
「主はご自分の民から私を分け離す」と。
宦官も言うてはならない
「見よ、私は枯れ木だ」と。
- ⁴ 主はこう言われる
宦官が私の安息日を守り
私が喜ぶことを選び
私の契約を固く守っているならば
- ⁵ 私の家と城壁の中では
私は、息子、娘にまさる記念のしるしと名を与え
消し去られることのないとしえの名を与える。
- ⁶ また、主に仕え、主の名を愛し、その僕となった
主に連なる異国の子ら
安息日を守り、これを汚すことのないすべての人が
私の契約を固く守るなら
- ⁷ 私は彼らを私の聖なる山に導き
私の祈りの家で喜ばせよう。
彼らの焼き尽くすいけにえと会食のいけにえは
私の祭壇の上で受け入れられる。
私の家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。
- ⁸ イスラエルの追ひ散らされた者たちを
集められ主なる神の仰せ——
私はさらに人々を集め
すでに集められた者たちに加えよう。

ヘブライ人への手紙10章1～10節

¹ 律法には、やがて来る良いことの影があるばかりで、そのものの実体はありません。ですから、年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人たちに完全な者にするにはできないのです。² もしてきたとするなら、礼拝する者たちは一度清められた以上、もはや罪の自覚がなくなるのですから、献げ物をするには中止されたはずで、³ ところが実際は、いけにえによって年ごとに罪の記憶がよみがえって来るのです。⁴ 雄牛や雄山羊の血は、罪を取り去ることができないからです。⁵ それで、キリストは世に来て、次のように言われたのです。

「いけにえも供え物も、あなたは望まず
私のために、体を備えてくださった。」

⁶ 焼き尽くすいけにえも清めのいけにえも

あなたは喜ばれなかった。

⁷ その時、私は言いました。

『御覧ください。私は来ました。』

巻物の書に私について書いてあるとおり、
神よ、御心を行うために。』」

⁸ 初めに、こう言われました。「いけにえや供え物、焼き尽くすいけにえや清めのいけにえを、あなたは望まれず、喜ばれなかった。」これらは、律法に従って献げられるものなのです。⁹ 次に、こう言われました。「御覧ください。私は来ました。御心を行うために。」第二のものを立てるために、最初のを廃止されるのです。¹⁰ この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、私たちは聖なる者とされたのです。

ルカによる福音書23章32～49節

³² ほかに、二人の犯罪人がイエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。³³ 「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。³⁴ [その時、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか分からないのです。』」人々はくじを引いて、イエスの衣を分け合った。³⁵ 民衆は立って見つめていた。議員たちも、嘲笑って言った。「他人を救ったのだ。神のメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」³⁶ 兵士たちもイエスに近寄り、酢を差し出しながら侮辱して、³⁷ 言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」³⁸ イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた罪状書きも掲げてあった。

³⁹ はりつけにされた犯罪人の一人が、イエスを罵った。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」⁴⁰ すると、もう一人のほうがちしなめた。「お前は神を恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。」⁴¹ 我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。⁴² そして、「イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、わたしを思い出してください」と言った。⁴³ するとイエスは、「よく言うておくれ、あなたは今日私と一緒に樂園にいる」と言われた。

⁴⁴ すでに昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、三時に及んだ。⁴⁵ 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。⁴⁶ イエスは大声で叫ばれた。「父よ、私の霊を御手に委ねます。」こう言って息を引き取られた。⁴⁷ 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を崇めた。⁴⁸ 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。⁴⁹ イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た女たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・4月2日「棕櫚の主日」の日課主題は「十字架への道」。「棕櫚の主日」から、「受難節」最後の週、「受難週(聖週間)」が始まる。

・「棕櫚の主日」には、主イエスが子ろばに乗ってエルサレムに入城された故事が記念され、古来、特別な「入堂行列」を伴う主日礼拝(ミサ)が営まれてきた。そこで、この「入堂行列」のための聖書日課が、通常の日課の他に設定されている。

・入堂行列の日課は、「ゼカリヤ書 9:9~10」(毎年固定)、「ルカによる福音書 19:28~40」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、エルサレム神殿の礼拝から排除されていたすべての人が共に礼拝に参集する日が来るという終末的預言の箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、律法の規定するいけにえに優るいけにえとしてのキリストを提示する箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが十字架につけられ息を引き取るまでの周囲の様子を伝える箇所。

旧約日課(イザヤ 56 章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言書。前8世紀末にかけて南王国ユダで四人の王に仕えた宮廷預言者「イザヤ」に帰される預言書だが、「預言者イザヤの預言の書」に基づくのは前半39章までで、40章以下は、前6世紀、バビロン捕囚時代から解放・帰還の時代にかけて「イザヤ」の伝統継承を自負する祭司・預言者集団によって付加されたものと考えられる。この後半部分は、「第二イザヤ」と呼ばれることもある。

・日課箇所は、「第二イザヤ」が神の計画の幻として告げる終末的預言で、「大イスラエル主義」の思想に基づいて、偏狭な民族主義やダビデ王家至上主義を排した普遍主義的な立場を示している。

・「異邦人」や「宦官」は、「申命記」23章の規定によって、「イスラエル」の民の共同体(会衆)から排除されるべきものと解された。「宦官」は、去勢された奴隷で、その特性により王宮・後宮に仕えるようになった者を指す。古代オリエント世界では、エジプトを除いて広く「宦官」が登用されていたと考えられており、その伝統からイスラム化した後にも非イスラム教徒の「宦官」が広く活躍していたことが知られている。日課箇所は、「イザヤ」の依って立つユダ王国の伝統において「宦官」が礼拝共同体(会衆)から排除されていたものとして告げられているが、「列王記」などは、南北王国で「宦官」が高位官職として置かれていたことを伝えている(王上22:9、王下8:6、9:32、23:11、24:12、エレ29:2など)。あるいは、「第二イザヤ」は、必ずしも王国時代の実態を前提にしてではなく、「申命記」の規定に基づく理念として彼らが「会衆」から排除されていたということを考えているのかもしれない。

使徒書日課(ヘブライ10章より)

・「ヘブライ人への手紙」については、前週資料「聖書と祈りの会230322」を参照。

・日課箇所は、本書簡が「大祭司=キリスト」論として展開してきた論考を踏まえて、「大祭司」として自らを「いけにえ」としてささげるキリストの、「いけにえ」としての完全性を論証しようとしている。この直前では、「地上の聖所」と「天の聖所」という理念的な対比を示して、「地上」のものが「天」のものの「写し(ヒュポデグマ=見本/手本)」にすぎず、一時的なもので、いずれ滅びてしまうものであるのに対して、「天」のものこそが「実体(エイコン=肖像/似姿)」を伴った永続的なものであると述べられている。本書簡は、「律法」の定める諸規定を、もっぱら「天にあるものの写し」にすぎないものとして見ており、逆説的に、「写し」にすぎない「地上」のものを通して「天にあるもの」の「実体」を認識しようと考えている。この認識に基づいて、「キリスト」は、「天にあるもの」の「実体」そのものであると主張している。このようなある種の「天地二元論」は、必ずしも「旧約」思想に根差したものではない。「旧約」思想の原則では、「天」の意志で「地上」に「実体(似姿)」として創造されたのが「人(アダム)」であるし、同様に、「天」の意志として「律法」が与えられている限りにおいて、「律法」の実現は「天」の意志の「実体」にほかならないと考える。本書簡は、「霊肉二元論」のようなある種のギリシア思想が影響しているのであろう。

・「真の大祭司」として自らの「体」をいけにえとして献げたキリストは、「天そのものの実体」として「贖罪のいけにえ」を最終的に完成させ、以後、「律法」に基づいて「写しにすぎない地上」の「いけにえ」を毎年献げることが不要になった、というのが本書簡の主張である。背景には、ユダヤ戦争の結果、紀元70年にエルサレム神殿が破壊されて神殿祭儀が途絶えたこと、それに代わる犠牲奉献を伴わない祭儀典礼がラビたちの指導の下で広まったことがある。本書簡は、ラビ的ユダヤ教とは異なる形で「犠牲奉献を伴わない祭儀典礼」をキリスト信仰のもとに位置づけようとしていると考えられる。教会史上、「キリストの犠牲奉献」は「聖餐」典礼の中に位置づけられてきたが、繰り返される「聖餐」において、その都度「犠牲」が献げられているのか否か、という問題が、16世紀の宗教改革における主要な神学論争となった。本書簡の主張に沿えば、「贖罪犠牲としてのキリスト」は、ただ一度、十字架死によって犠牲奉献を完成させたので、これを繰り返す必要はないことになる。この「犠牲としての十字架の一回性」を厳密に適用すれば、「聖餐」典礼で犠牲奉献そのものが繰り返されているようにみなさるべきではないとM・ルターは主張したため、ルター派教会では、「聖餐」典礼から一切の犠牲奉献的要素を排除しようとした(これを徹底する同教会では、聖餐卓に献金を献げることさえ拒否してきたが、近年は、これを緩和している)。

福音書日課(ルカ 23 章より)

・日課箇所は、主イエスが十字架につけられた場面を描く箇所。四福音書がいずれもこの場面を描いており、「共観福音書」は基本的に同じ伝承物語を用いていると考えられる。にもかかわらず、「ルカ」は独自の逸話をここに加えている。すなわち、日課箇所中で、①人々の赦しをとりなす主イエスの言葉(34 節)、②十字架にかけられた犯罪人の一人が主イエスと言葉を交わした逸話(40~43 節)、③死の間際の主イエスの言葉(46 節)、などは「ルカ」独自の伝承逸話である。・独自の伝承逸話が示すのは、「ルカ」が総じて、十字架上の主イエスを神に信頼を置くとりなし手と考えているということだろう。これは、「ルカ文書」全体に見られる「イエス」観であり、「キリスト信者」観でもあり、「祭司的役割」を強調するものと考えられる。

来週の誕生日 (4月2日~8日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-307 番「ダビデの子、ホサナ」は、スウェーデン語聖書のマタイ 21:9 の聖句に、18 世紀末スウェーデン国王の招きで活動したドイツ人音楽家フォクラーが作曲。スウェーデンおよびフィンランドの福音ルーテル教会讚美歌集で 1 番に収められた待降節第 1 主日用の讚美歌。フィンランド語版からこども讚美歌に採用され、棕櫚の主日の聖句であることに即して受難節ごとに棕櫚の主日用の讚美歌として採用。
- ・21-306 番「あなたもそこにいたのか」(= II 177) は、代表的なアフロ・アメリカン霊歌の一つで、歌詞および曲には多数の版が知られている。最初の出版は、19 世紀末、ウィリアム・E・バートンの編じた讚美歌集。
- ・21-311 番「血しおしたたる」(= I 136) は、12 世紀フランスの神秘思想家クレルヴォーのベルナルドゥスの弟子であるシトー会修道士アルヌルフ・フォン・レーヴェンのラテン詩に基づいて、17 世紀ドイツを代表する讚美歌作家 P. ゲルハルトが作詞。曲は、ルター派の作曲家ハンス・レオ・ハスラーが恋愛歌「わが心は千々に乱れ」として作曲した旋律で、1613 年出版のコーラル集「聖なる調和」に「心より憧れ望む」の曲として採用されていたものが、1656 年出版の讚美歌集「歌による敬虔の訓練」でゲルハルトの歌詞と結びつけられた。原曲は 21-310 番のリズムだったが、「血しおしたたる」と結びつけられるまでに 21-311 番のリズムに改変された。バッハの「マタイ受難曲」等で使用されている。
- ・21-112 番「イエスよ、みくにに」は、テゼ共同体の讚美曲の一つで、ルカ 23:42「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」を歌う。テゼ共同体は、第二次世界大戦後、フランスの寒村テゼで始められた超教派の共同体(一種の修道会)で、常に、多くの巡礼者を受け入れて、共同生活を送っている。祈り(礼拝)の様式は、聖句や伝統的な典礼文を歌詞とするシンプルな形式の歌を繰り返し歌いつつ黙想することで知られている。

21-307「ダビデの子、ホサナ」

Hoosianna, Daavidin Poika

21-306「あなたもそこにいたのか」

Were You There

1. Were you there when they crucified my Lord?
Were you there when they crucified my Lord?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when they crucified my Lord?
2. Were you there when they nailed him to the tree?
Were you there when they nailed him to the tree?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when they nailed him to the tree?
3. Were you there when they laid him in the tomb?
Were you there when they laid him in the tomb?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when they laid him in the tomb?
4. Were you there when God raised him from the tomb?
Were you there when God raised him from the tomb?
Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
Were you there when God raised him from the tomb?

21-311「血しおしたたる」

O Haupt voll Blut und Wunden

1. O Haupt voll Blut und Wunden, / voll Schmerz und voller Hohn, / o Haupt, zum Spott gebunden / mit einer Dornenkron, o Haupt, / sonst schön gebzieret / mit höchster Ehr und Zier, / jetzt aber hoch schimpfieret: / begrüßet seist du mir!
2. Du edles Angesichte, / davor sonst schrickt / und scheut das große Weltgewichte: / wie bist du so bespeit, / wie bist du so erleuchtet! / Wer hat dein Augenlicht, / dem sonst kein Licht nicht gleicht, / so schändlich zugericht'?
3. Nun, was du, Herr, erduldet, / ist alles meine Last; / ich hab es selbst verschuldet, / was du getragen hast. / Schau her, hier steh ich Armer, / der Zorn verdient hat. / Gib mir, o mein Erbarmen, / den Anblick deiner Gnad.
4. Erkenne mich, mein Hüter, / mein Hirte, nimm mich an. / Von dir, Quell aller Güter, / ist mir viel Guts getan; / dein Mund hat mich gelabet / mit Milch und süßer Kost, / dein Geist hat mich begabet / mit mancher Himmelslust.
5. Ich will hier bei dir stehen, / verachte mich doch nicht; / von dir will ich nicht gehen, / wenn dir dein Herze bricht; / wenn dein Haupt wird erblassen / im letzten Todesstoß, / alsdann will ich dich fassen / in meinem Arm und Schoß.
6. Es dient zu meinen Freuden / und tut mir herzlich wohl, / wenn ich in deinem Leiden, / mein Heil, mich finden soll. / Ach möcht ich, o mein Leben, / an deinem Kreuze hier / mein Leben von mir geben, / wie wohl geschähe mir!
7. Ich danke dir von Herzen, / o Jesu, liebster Freund, / für deines Todes Schmerzen, / da du's so gut gemeint. / Ach gib, dass ich mich halte / zu dir und deiner Treu / und, wenn ich einst erkalte, / in dir mein Ende sei.
8. Wenn ich einmal soll scheiden, / so scheid nicht von mir, / wenn ich den Tod soll leiden, / so tritt du dann herfür; / wenn mir am allerbängsten / wird um das Herze sein, / so reiß mich aus den Ängsten / kraft deiner Angst und Pein.
9. Erscheine mir zum Schilde, / zum Trost in meinem Tod, / und lass mich sehn dein Bilde / in deiner Kreuzesnot. / Da will ich nach dir blicken, / da will ich glaubensvoll / dich fest an mein Herz drücken. / Wer so stirbt, der stirbt wohl.

21-112「イエスよ、みくにに」

Jesus, Remember Me

Jesus, remember me when you come into your Kingdom.